九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

超人の幸福における永遠回帰の肯定

新名, 隆志
九州大学大学院 : 博士課程 : 倫理学

https://doi.org/10.15017/1430805

出版情報：哲学論文集. 34, pp.47-62, 1998-09-25. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

超人の幸福における永遠回帰の肯定

新名隆志

序

『この人を見よ』においてニーチェは、「およそ到達されうる限りでの最高の肯定の定式」としての永遠回帰思想が、『ツァラトゥストラはこう語った』の「根本構想Grundconception」であると述べている（EH, 335）。一八八一年八月の思想の着想から十八カ月の「妊娠状態」を経て、この著作が生み出された（EH, 336）。永遠回帰に関しては、その着想以来、実に様々な断章が遺稿としてのこされており、またニーチェ自身この思想に関する何らかの理論的著作を計画したこともあった。[1] しかし実際に彼が著した永遠回帰伝達の書としては、この理論的著作とは到底言えない、むしろ一種の文学作品と思えるこの著作が唯一なのである。したがって永遠回帰は、あくまでもこの著作の解釈において理解されねばならない。

『ツァラトゥストラ』は、「ツァラトゥストラ」なる人物の説教と彼自身の物語によって構成されているが、永遠回帰は彼

の説教の内容として明示されることはない。それゆえ、彼自身の物語の解釈が重要となる。彼の物語は、永遠回帰に対する彼の関わり方の変化を含んでいる。周知のように、永遠回帰は肯定的側面とともに「ニヒリズムの極限形式」としての否定的側面を持つ。ツァラトゥストラは初めから永遠回帰を肯定しているわけではなく、その否定的側面を克服して肯定に達しなければならないのである。この点に関しては、ハイデガーの解釈以来『ツァラトゥストラ』解釈が前提としていることであり、異論はないと思われる。したがって、ツァラトゥストラが真に永遠回帰を肯定するのはどの箇所においてなのか、それが特定されねばならない。そしてそこにおいてこそ、「最高の肯定の定式」としての永遠回帰の意味が理解されねばならない。

そこで、永遠回帰が真に肯定される箇所が重要な問題となってくるわけだが、これを第三部と見なす点において従来の解釈は一致している。その先駆けとなったのは、やはりハイデガーの解釈であろう。彼は第三部の「快癒する者」において永遠回帰の肯定が達成されたと見ている。そして第四部は完全に無視する。その他の解釈にしても、ハイデガーの解釈をそのまま踏襲するわけではないものの、第三部の「快癒するもの」以後に真の肯定を見る点では同じである。(2) しかしこの解釈には重大な欠点がある。それは、第三部の中でのみ解釈が構築されており、著作全体の展開が考慮に入れられていないという点である。ツァラトゥストラの肯定への物語が真に開始されるのは第三部からであるが、この物語の展開は第一部・第二部に支配されている。そしてそれを考慮した場合、第四部「夜をさまよう者たちの歌」で語られる肯定こそが決定的である。従来の解釈は、永遠回帰の肯定に関して第三部と第四部の間にまったく進展を見ず、「夜をさまよう者たちの歌」における肯定を第三部の肯定の繰り返しと見なしている。しかし、両者の叙述には明らかな差異があり、同じことを語っているとは考えられない。永遠回帰の真の肯定が語られているのは第四部「夜をさまよう者たちの歌」においてであり、そこでの「快 Lust」が「超人の幸福」としてこの肯定の本質であること、このことをこの論文で論証したい。

一　超人の幸福

『ツァラトゥストラ』第一部の核心は、「超人 Übermensch」の教説だと言うことができる。なぜなら、この部におけるツァラトゥストラの説教は、超人の教えに始まり超人の教えで終わるからである。永遠回帰を根本構想とするこの著作がなぜ超人の教説をもって始められるのか、超人と永遠回帰との関係は何か、これは当然問われてよい問いである。しかし超人と永遠回帰の関係を直接語る表現は、『ツァラトゥストラ』の内部にはなく、遺稿の中の二箇所にあるのみである。まず一八八三年六月-七月の時期の遺稿には次のようにある。「彼は我を忘れ、超人から永遠回帰を教える。超人はそれに耐え、それによって訓育する。」(KSA10, 10 [47])

超人は永遠回帰に耐え、それによって人々を訓育する存在である。また、この断章はツァラトゥストラによる永遠回帰の告知の場面の構想であるが、彼はこの教説を「我を忘れ sich vergessen」、「超人から aus dem Übermenschen」教える、と言われている。これはつまり、彼がそれまでの自己を超え出て、超人となることを意味しているのではないのか。このことは次の一八八三年秋の遺稿を示すことでよりはっきりとするだろう。

「まったく自己において目標／その後でツァラトゥストラは、超人の幸福から、すべてが回帰するという秘密を語る。」(KSA10, 20 [10])

ツァラトゥストラは「超人の幸福から」回帰の教説を語る。やはり、永遠回帰告知の場面においてツァラトゥストラが超人になるということが想定されているのである。しかし、奇妙に思えるのは「幸福 Glück」という言葉である。超人が永遠回帰を語るという事態において、「幸福」とはいったいいかなる意味を持つのだろうか。

ここで注目すべきなのは、「ツァラトゥストラは、超人の幸福から・・・」の部分は「その後で Darauf」という言葉に続

いており、それゆえその直前の「まったく自己において目標 ganz in sich Ziel」の部分を受けているということである。これはすなわち両者の何らかの関係性を示しているはずだが、この関係性においてここでの「幸福」の意味が理解できる。「幸福」とは、アリストテレス以来の伝統の中で、目的 telos に達していること、つまりその外に目的を持たない究極的な teleios ものとされてきた。「幸福こそは究極的・自足的な或るものであり、われわれの行うところのあらゆることがらの目的であると見られる。」[3] つまり「まったく自己において目標」という言葉は、自己の外に目標を持たないということ、目標に達しているということであり、まさにここでの「幸福」の意味と考えられる。永遠回帰に耐え、それを語るとき、ツァラトゥストラは幸福の内にある。彼はもはや自己の外に「〜のために」という目的を持たずに、自己充足的な境地にいるのである。

さて、この論文の目的は『ツァラトゥストラ』において「最高の肯定の定式」としての永遠回帰を解釈することであったが、ここで我々は以下の論証の結果を予想する重要な問いを得る。すなわちそれは、『ツァラトゥストラ』の中で永遠回帰の真の肯定はまさに「超人の幸福」として語られているのではないのか、という問いである。超人が永遠回帰に耐える者であり、また構想でツァラトゥストラが超人となることが想定されているならば、このように考えるのは当然であろう。もちろん、この是非が答えられるのはツァラトゥストラの物語全体が解釈された後である。まずは第一部の超人の教説がどのように語られているかを見ていこう。

すでに述べたように『ツァラトゥストラ』は超人の教説で始められる。この教説よって人間は新しい意味を獲得する。人間は「克服されるべきもの」(Za, 14)、「動物と超人との間にかけられた一本の綱」(Za, 16) となる。

「人間において偉大であるもの、それは、人間がひとつの橋であって目的ではないということである。」(Za, 16f.)

「目的」とは超人にほかならない。人間はそれへの移行を示す「橋（綱）」であるとされる。そしてツァラトゥストラは、超人のために生きるように人々に説く。すなわちここで、人間の「目的」としての超人の教えが説かれるのである。もしツァラトゥストラがこの目的に到達するならば、それは彼が超人となったことを意味する。そして同時に、彼はいまや目的に

達しているのだから、幸福であると言える。すなわち第一部での超人の教説から、「超人の幸福」を予想することはできるのである。しかし問題は、ツァラトゥストラが超人になるということが、そしてこの超人になった彼の幸福が、『ツァラトゥストラ』の中で語られているのかどうかである。少なくとも第一部の時点では、ツァラトゥストラは超人であるとは考えられないし、また彼自身が超人となることを目指しているとも読み取れない。しかし、一八八三年秋の第三部構想期の遺稿には次のようにある。

「第三部はツァラトゥストラの自己超克である、人類の自己超克の模範としての――超人のための」(KSA10, 16[65])

ここから、ニーチェは第三部においてツァラトゥストラ自身の超人を目指す自己超克を描こうとしていたことが読み取れる。たしかに、第二部までの説教中心の話とはうってかわり、第三部でツァラトゥストラは再び孤独へと立ち返り、彼の最後の自己超克の道を歩み出すのである。それでは第三部以降でツァラトゥストラは実際に超人となるのであろうか。しかしその検討に移る前に、まず第三部以降の物語全体を支配している第二部の叙述を見ておかなければならない。

二　「救済について」、「最も静かなる時」

第二部の中の重要な章として、まず「救済について」が挙げられる。この章の重要性は、それが永遠回帰と深い関係を持つという点に存する。この章は過去の救済を主題としている。通常我々は過去を意志するということはできない。すなわち「意志は後戻りして意志することはできない」(Za, 180)。しかしこれに対しツァラトゥストラは次のように教える。

「過ぎ去ったものを救済し、すべての〈かくあった〉を〈そのように私が欲した!〉につくり変えること――これこそが私にとって初めて救済と呼ばれる!」(Za, 179)

すなわちツァラトゥストラは「後戻りして意志すること」を教え、これを「救済」と呼ぶのである。ここで注目すべきな

のは、この救済の教えが非常に印象的な形で終えられることである。

「しかしながら、いかにして意志にこのようなことが起こるのか？　誰が意志に、後戻りして意欲することすらも教えたのか？／――しかし彼の話がこの箇所にきたところで、ツァラトゥストラは突然話を中断し、彼は極度に驚愕した者と同じように見えた。」(Za, 181)

ツァラトゥストラのこの驚愕と話の中断はいったい何を意味しているのだろうか。著作全体の中でツァラトゥストラが自分の話に恐れを抱く場面は、ここを除いてはただ一箇所しかない。それは、第三部「幻影と謎について」で永遠回帰が暗示的に語られる場面である。そこではツァラトゥストラは、「自分自身の思想と背後の思想を恐れて」どんどん小声で語るようになる(Za, 200f.)。すなわち、ツァラトゥストラが自ら語ることを恐れる思想とは永遠回帰以外には考えられない。「救済について」においても、彼は自分の教えの背後に永遠回帰思想を感じとったがゆえに、驚愕して話を中断したのである。事実、後で明らかにすることだが、第四部「夜をさまよう者たちの歌」では、まさに意志が後戻りして意欲することによる過去の遡及的肯定として永遠回帰の肯定が語られる。ツァラトゥストラが中断した問いの答えは、そこで初めて明らかとなるのである。すなわち、後戻りして意欲することは彼の永遠回帰の肯定において起こり、またこのことを教えるのは彼自身なのである。つまりこの「救済について」は、第四部で実現される真の救済を予言する章と言うことができる。ここで、先に挙げた一八八三年秋の「超人の幸福」についての断章の直前部分を引用しよう。

「偶然からの救済。私が生ずるがままにしておいたもの、それを私は後から自分に償うことができる。そしてそれゆえに、私が以前は欲しなかったものを、後から欲することができる。」(KSA10, 20[10])

これが書かれたのは第二部成立後の第三部構想期であるが、この内容は明らかに「救済について」と対応している。このことは、第二部で予言された「救済」がツァラトゥストラが超人となり永遠回帰を告知する場面において実現する、と想定されていたことを示している。このように、「救済について」は永遠回帰と深い関係にあり、この教説が真に肯定されるとき

に実現されるべきこととして、後の物語を規定しているのである。

また第二部の中で「救済について」と同じくその後の物語を規定する章として、この部の最後の章である「最も静かなる時」が挙げられる。なぜなら、第三部以降のツァラトゥストラの歩みは、ここでの「最も静かなる時」の要求の実現に向けられているからである。その要求とはこうである。

「おお、ツァラトゥストラよ、お前の諸々の果実は熟しているが、お前はお前の諸々の果実にとって熟していないのだ！／だからお前は再び孤独に帰らねばならない。というのも、お前はなお柔らかくなるべきだからだ。」(Za, 189f.)

ツァラトゥストラの熟した「諸々の果実」とは、永遠回帰と解すべきであろう。この時点でのツァラトゥストラは、たしかにそれを知ってはいるが、それを語ることを欲しない (vgl. Za, 188)。そこで「最も静かなる時」が、この思想にふさわしく「熟す」ことを彼に要求するのである。この要求を受けて彼は友人たちのもとを去り、再び孤独に帰る。第三部最初の章である「漂泊者」は、これから熟しへの道を歩もうとする彼の決意を述べるものである。それではこの道が終わるのはいつなのか。それは、彼の熟しを示す「しるし」がいつ現れるかということから捉えられる。「最も静かなる時」には次のような対話がある。

「〈私に欠けているのは、すべての命令のためのシシの声である。〉／するとそれは再びささやくように私に語った。〈嵐をもたらすのは、最も静かな言葉である。ハトの足をもってやって来る諸思想が、世界を導く〉」(Za, 189)

ここで語られている「シシ」および「ハト」の登場こそが、ツァラトゥストラが熟したことの「しるし」となる。そのことは第三部構想期の遺稿にもはっきりと示されている (vgl. KSA10, 16[51], 18[45])。ところがこの「しるし」は第三部には現れない。「新旧の諸板」の中で一度「ハトの群れを伴った笑うシシ」としてこれが言及されるが、そこはツァラトゥストラがまだこの「しるし」の登場を待っているところとして描写されている (Za, 246)。従来の解釈が重視するその直後の「快癒しつつある者」以降の章でも、それはやはり現れない。それが初めて現れるのは、第四部「しるし」においてである。そ

の中でツァラトゥストラが「しるしが来た」と語る場面があるが、この言葉とともに彼の足もとにハトの群れを伴ったシシが現れる（Za, 406）。そして彼は次のように語る。

「よし！　シシが来た、私の子供たちが近くにいる、ツァラトゥストラは熟した、私の時が来た」（Za, 408）

すなわち、ツァラトゥストラが真に熟するのは第四部の終わりにおいてなのである。しかし、何がこの熟しを決定づけたのであろうか。ここで再び、「しるし」の直前の章である「夜をさまよう者たちの歌」が重要な意味を持ってくる。なぜなら、まさにそこでの出来事こそが「しるし」の登場を可能にしたと考えられるからである。このような展開を見る限り、従来の解釈のように「夜をさまよう者たちの歌」を第三部での永遠回帰の肯定のたんなる繰り返しとして見なすことはできない。そこにはやはり何らかの進展があるはずなのである。

さて、以上論じてきたことを踏まえた上で、我々は初めて第三部以降の考察に移行できる。我々の主張は、第四部「夜をさまよう者たちの歌」こそが永遠回帰の肯定に関して決定的な箇所であるということであったが、この主張は従来の解釈と完全に対立する。我々は第三部では真の肯定を認めないのである。そこでまず、従来の解釈が重視する、第三部の「快癒しつつある者」以降の章を検討することにしたい。

三　第三部と第四部の差異

最初に述べたように、従来の解釈は永遠回帰の肯定に関して第三部の解釈にのみ終始しており、物語全体の展開を考慮に入れていない。これが許されないことであるのはもはや明らかであろう。第三部以降の物語は、それのみで理解することは許されず、それ以前と以後を含めたより大きな枠組みの中で理解しなければならないのである。しかし第三部の「快癒しつつある者」以降の章の中では、第三部以降の物語を規定するとして先程論じられたこと、すなわち「過去の救済」と「熟し」

のいずれも実現されない。このことだけでも、従来の解釈に対し疑問を投げかけるには十分な理由となるだろう。しかしここではさらに、従来の解釈が同じことの繰り返しと見なしている第三部と第四部の描写の明らかな差異を示すことによって、それに対する決定的な反証としたい。まずは、「快癒しつつある者」の次の章に当たる「大いなる憧憬について」の一節を挙げよう。

「おお、我が魂よ、あふれるほど豊かで重たげに、お前はいまやそこに立っている。膨らんだ乳房と、窮迫した褐色の黄金なすブドウの房をつけたブドウの木がそこに立っているのだ。――／――お前の幸福によって窮迫して、圧迫されて、過剰のあまり待ちながら、そしてお前が待っているがゆえに恥じながら。」(Za, 279)

ここではツァラトゥストラの魂が「ブドウの木」として描かれる。この魂は豊かであるが、それは充足よりもむしろ「窮迫している gedraengt」ことを意味している。それゆえこの魂は何ものかを待っており、それに「憧れの手を差し伸べている」(ibid.)。この章の表題である「大いなる憧憬について」とは、まさしくこの魂の憧憬を意味しているのである。では、それはいったい何に対する憧憬なのであろうか。

「ブドウ摘みの男とブドウ摘み用の小刀とを必要としていることすべてについてのお前の苦悩（後略）」(Za, 280)

魂の憧憬は、自分の豊かなブドウの房を摘んでくれる「ブドウ摘みの男」に向けられている。それはこの魂の「大いなる救済者」であるが、いまだ「無名の者」である (ibid.)。ところが、第四部「夜をさまよう者たちの歌」では、ツァラトゥストラは次のように語る。

「お前、ブドウの木よ！　なぜお前は私を讃えるのか？　私はお前を摘んだのに！」(Za, 401)

すなわち、ここではツァラトゥストラ自身が自分を「ブドウ摘みの男」と呼んでいるのである。彼の魂の救済者は彼自身であったことがここで明らかになる。「大いなる憧憬について」からこの章の間に何らかの進展があるのは明らかである。従来の解釈は、「夜をさまよう者たちの歌」における永遠回帰の肯定を第三部の肯定のたんなる繰り返しと見ているのであるが、

それは受け入れることはできない。

さらに、次の「もう一つの舞踏歌」の章にも、第四部との差異が見て取れる。この章で現れる永遠回帰の肯定を表す鐘の音は、「夜をさまよう者たちの歌」の中でもう一度繰り返されることになる。しかしこれはたんなる繰り返しではない。第三部においては、ツァラトゥストラはそれを鐘の音として聞くのみである。それに対して第四部では、次のように言われる。

「私はお前たちの耳にあることを告げたい、あの古い鐘がそれを私の耳に告げるように」(Za, 397)すなわち、ツァラトゥストラはここで初めて永遠回帰の歌を自分の言葉として語るのである。

最後に、第三部最後の章である「七つの封印」についても同様に言うことができる。ここで述べられる「然りとアーメンの歌」は、永遠回帰の肯定を示す決定的な箇所と考えられている。[4] 肯定を意味するとされている七度繰り返されるリフレインは、次のようなものである。

「おお、どうして私が永遠を求めて、指輪 Ring の中の指輪である結婚指輪を求めて、――回帰の指輪をもとめて、欲情に燃えないはずがあろう！／私はいまだかつて、その子供を得たいと思うような女を見つけたことがない、私の愛するこの女を除いては。というのも、私はお前を愛するからだ、おお、永遠よ！／というのも、私はお前を愛するからだ、おお、永遠よ！」(Za, 287ff.)

しかし「夜をさまよう者たちの歌」においては、永遠回帰を肯定する快は「継承者たちを欲しない、子供たちを欲しない」(Za, 402) と言われる。両者の差異は明瞭である。前者においては、ツァラトゥストラは「欲情に燃えて brünstig」おり、「子供」を欲しているのである。後で述べるように、「子供を欲しない」ということは、「快」において、そして「熟したもの」において本質的なことである。したがってここでの差異は、たんなるレトリックの問題としてすますことはできない。第三部最後でのこの歌は、ツァラトゥストラがいまだ熟していないこと、そして永遠回帰を肯定する「快」に達していないことを露呈している。この歌は、従来の解釈とは反対に、むしろツァラトゥストラが真の肯定に達していないことを決定づ

けるのである。

さてこのように、第三部「快癒しつつあるもの」以降と第四部「夜をさまよう者たちの歌」には、明瞭な差異がある。両者を安易に同じレベルで捉えることは許されない。両者の差異は、永遠回帰の肯定に関する第四部における何らかの進展を暗示している。そして実に、第四部「夜をさまよう者たちの歌」において初めて、「超人の幸福」が、「過去の救済」が、ツァラトゥストラの「熟し」が実現するのである。最後にこのことを論証することによって、永遠回帰の真の肯定がこの章において初めて達成されることを示したい。

四　「快」からの永遠回帰の肯定

「夜をさまよう者たちの歌」の考察に移る前に、そこでの永遠回帰の肯定を予言する章である「正午に」に注目したい。この表題が、まさにこの章の重要性を物語っている。なぜなら「正午 Mittag」という言葉は、永遠回帰と密接な関係にあるからである。『ツァラトゥストラ』最初の構想と考えられる遺稿では、そのタイトルは「正午と永遠 Mittag und Ewigkeit」とされていた（KSA9, 11[195]）。また事実、この著作全体が「大いなる正午」を目指しての物語として構成されている。だがこの「正午」とはいったいいかなる時刻なのか。それは永遠回帰の肯定についていかなることを示してくれるのか。

この章では、ツァラトゥストラが正午の頃にブドウの木に巻き付かれた一本の老木のそばで眠るという出来事が描かれているのだが、彼はその眠りの中で次のように語る。

「世界はまさに完成したのではないのか？　丸くなり熟したのではないのか？　おお、黄金の丸い輪よ――それは一体どこへ飛んで行くのか？　私はそれを追いかけよう！　すばやく！／静かに」（Za, 344）

まず「静かに Still」という言葉に注目しよう。この言葉はこの章の中で何度も繰り返され、正午という時の性格を示して

いる。ここにおいていまや、あの「最も静かなる時」は正午として理解されうる。第二部の最後でツァラトゥストラを襲った静けさは、この正午における静けさである。さらにこの静けさが意味するものは、「世界が完成した die Welt ward vollkommen」ということにほかならない。「静かに」という言葉は、常にこの「世界の完成」という言葉と対で現れるのである (Za, 342, 344)。さらにいくつかの言葉の連関を押さえることが重要である。「完成」は、「丸くなり熟した rund und reif」ことと言い換えられ、それが「黄金の丸い輪 der goldene runde Reif」とさらに言い換えられる。正午に現れる「輪」の象徴は、永遠回帰を意味すると考えられる。とすればここでは、永遠回帰が世界の完成＝熟しとして示されているのではないのか。

先に述べたように、この章はいわば「夜をさまよう者たちの歌」の予見に当たる章である。「夜をさまよう者たちの歌」の中で、ツァラトゥストラは再び「静かに！」と語り (Za, 398)、世界の完成を語る (Za, 400)。ただし今度の時刻は正午ではなく、その正反対の「真夜中 Mitternacht」である。しかし「真夜中は同時に正午である」(Za, 402)。ツァラトゥストラは、正午に午睡の中で幻想としてみた世界の完成を、今度は真夜中の覚醒の中で現実のものとして体験するのである。

さて、そこで最後に「夜をさまよう者たちの歌」の考察に移らねばならない。まさにこの章において初めて、ツァラトゥストラは熟し、世界は完成する。そしてそれは、ここでの永遠回帰の肯定を意味する「快 Lust」において実現されるのである。重要なのは、この「快 Lust」とは何であるかを正確に捉えることである。

「〈完成したもの、すべての熟したものは――死ぬことを欲するのだ！〉このようにお前は語る。祝福されよ、ブドウ摘み用の小刀は祝福されよ！　しかし、すべての未熟なものは生きることを欲する。悲しいかな wehe！／苦しみ Weh は語る、〈過ぎ去れ、失せよ、お前、苦しみよ！〉しかし、すべての苦悩する leiden ものは生きることを欲する。熟し、快に満ち lustig、憧憬に満ちんがために。／より遠いもの、より高いもの、より明るいものへの憧憬に満ちんがために。〈私は継承者を欲する〉と、苦悩するもののすべては語る。〈私は子供たちを欲する、私は私を欲しない〉、――／しかし快は継承者たちを欲しない、

子供たちを欲しない、　――快は自己自身を欲する、永遠を欲する、回帰を欲する、すべてのものが自己と永遠に同じであることを欲する。」(Za, 401f.)

回帰を欲する「快」に「苦 Weh, Leiden」が対比されている。この両者の対比を簡単に図式化すると次のようになる。

快・・・完成したもの（熟したもの）、自己を欲する、子供（継承者）を欲しない。死を欲する。

苦・・・未完成なもの（未熟なもの）、自己を欲しない、子供（継承者）を欲する。生を欲する。

このような「快」と「苦」の対比は、「目的に達している」と「目的に達していない」の対比としてのみ正確に理解される。「快」とはすなわち目的に達した状態のことである。すなわち快は、もはやこれ以上「どこへ」をもたない。したがって、この「快」はもはや子供を欲しないし、生を欲しない。それは自己を欲し、自己にとどまることを欲するのである。これに対して「苦」は、いまだ目的に達していない状態を表す。目的は自己の外にあるがゆえ、「苦」はそこへと生成することを欲する。したがって「苦」は生を欲し子供を欲する。それは自己を欲しない。

またこの意味でのみ、「快」が「完成したもの」と重ねられていることが理解されうる。「完成した vollkommen」という言葉は、「目的に達している」という意味にほかならない。このことは、ギリシア語の telos（目的）と teleios（完成した・完全な）の関係では明らかである。teleios と言われるのは、telos に達したものなのである。ドイツ語においても、vollkommen という言葉は中高ドイツ語では zum Ziel kommen を意味していた。[5] ところで、このように「快」を「完成」として理解するのは、アリストテレス以来の伝統に属している。「快楽の場合はこれに反して、それの形相はいかなる時間についてみても究極的である。明らかにそれゆえ、運動と快楽とは互いに異なったものなのであり、快楽は全体的なるもの・究極的なるものに属するといえよう。」[6] ここで「究極的」と訳されているのは teleios である。すなわち快は完成したものに属する。

さて、このように「快」とは、「目的に達していること＝完成していること」として理解すべきなのだが、この「快」による永遠回帰の肯定とは次のような事態を意味している。

「お前たちはかつて一つの快 Lust に然りと言ったことがあるか？　おお、我が友たちよ、そう言ったとすれば、お前たちはすべての苦しみ Weh にも然りと言ったことになるのだ。すべての事物は鎖でつながれ、糸でつながれ、愛でつながれているのだ、――／――お前たちがかつて、一度あったことを二度欲したならば、お前たちがかつて、〈お前を気に入った、幸福よ！　刹那よ！　瞬間よ！〉と語ったならば、お前たちはすべてが帰ってくることを欲したのだ！／すべてが新たに、すべてが永遠に、すべてが鎖でつながれ、糸でつながれ、愛でつながれて、おお、そのようにお前たちは世界を愛したのだ、――／――お前たち永遠なるものよ、世界を永遠に、そして常に愛せ。そして、苦しみに対しても語れ。過ぎ去れ、しかし帰ってこい！　と。というのも、すべての快は欲するからだ――永遠を！」(Za, 402)

「快」の肯定において、その他の一切がこの「快」とつながれたものとして肯定される。これは、目的に達したものが、自己の肯定において自己に至る一切の生成過程をも肯定するということに他ならない。これこそが永遠回帰の肯定である。そしてここにおいて初めて、目的への到達における過去の遡及的肯定として、第二部「救済について」で予言された「救済」が実現されるのである。

以上述べたことから明らかなように、『ツァラトゥストラ』における永遠回帰の真の肯定は、第四部「夜をさまよう者たちの歌」において初めてなされる。そしてその意味は「快」における過去の遡及的肯定としての過去の救済である。最後に、我々は再び「超人」の問題に立ち返ろう。「夜をさまよう者たちの歌」において、ツァラトゥストラは熟し、快に達する。これはすなわち彼が「目的に達した」ことを意味している。とすれば、彼はこの章において超人になったのである。なぜなら、超人とはまさに「目的」であったのだから。我々は初めに、「超人の幸福」こそが著作の内部でも真の肯定として語られているのではないかと予想した。この「幸福」は、「目的に達していること」として、この章での「快」とまったく同一のものである。つまり、「夜をさまよう者たちの歌」においてツァラトゥストラが超人となり、超人の「快」から回帰の秘密を高等な人間たちに語るという形で、あの一八八三年秋の構想が著作の内部で実現している。すなわち――

「まったく自己において目標／その後でツァラトゥストラは、超人の幸福から、すべてが回帰するという秘密を語る。」

凡例

ニーチェの著作・遺稿からの引用・参照箇所はすべて、Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe. 15 Bde. Hrsg. von Giorgio Colli/Mazzino Montinari, Walter de Gruyter, 1980. に依る。

本文中では、以下の略号を用いて引用し、著作に関しては頁数を、遺稿に関しては遺稿番号を付した。

Za＝Also spracha Zarathustra

EH＝Ecce homo

KSA＝Nachgelassene Fragmente

註

(1) ニーチェは第三部脱稿後、『ツァラトゥストラ』とは違った形での著作の構想を数多く立てているが、その中に永遠回帰という表題で構想されたものがかなりある。その中でも明らかに理論的著作の計画と考えられるものとしては、例えば KSA10, 24 [4] や KSA11, 27 [80]。

(2) 第三部を重視する解釈は、伝統的なものとしてはハイデガーやフィンクの解釈がある（vgl. Martin Heidegger : Nietzsche, Neske, 1961., Eugen Fink : Nietzsches Philosophie, W. Kohlhammer, 1960.）。
また比較的最近のものとしては、Hans-Georg Gadamer : Das Drama Zarathustras, Nietzsche Studien Bd.15, 1986, S.8., Greg Whitlock : Returning to Sils-Maria, Peter Lang, 1990, pp. 23-26. を参照。

(3) アリストテレス『ニコマコス倫理学』高田三郎訳、岩波文庫、1097b 参照。

(4) 従来の解釈は、第三部「快癒しつつある者」以降を重視するという点では一致するが、その中のどの箇所に真の肯定を見るかという点については相違がある。例えばハイデガーは「快癒しつつある者」にすでに肯定を見るのであるが (vgl. Heidegger, op. cit., S. 438ff.)、Greg Whitlock はこの「七つの封印」において初めて真の肯定を見る(see, Greg Whitlock, op. cit., p. 227)。

(5) 『独話大辞典』、小学館、一九九〇年、二四四七頁参照。

(6) アリストテレス、前掲書、1174b 参照。なお、このような快は運動（キーネーシス）と対比されて、エイネルゲイアとして捉えられる。藤沢令夫はこのエネルゲイアの特質を時間の内にないことと捉え、そこに指向されているのは「時間的な永続性と区別される超時間的な永遠性」ではないかと述べている（藤沢令夫『イデアと世界』、岩波書店、一九八〇年、二五六頁参照）。ニーチェが「正午に」及び「夜をさまよう者たちの歌」で「永遠の泉」として語る永遠性はまさにこの超時間的な永遠性と言える。そこでは時間が消え失せるのである (vgl. Za, 344, 398)。

（本学大学院博士課程・倫理学）